

# アエネアス、逃げる : ウェルギリウス『アエネイ ス』第4歌

著者	丹下 和彦
雑誌名	研究論集
巻	82
ページ	69-84
発行年	2005-08
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006271">http://doi.org/10.18956/00006271</a>

## アエネアス、逃げる

——ウェルギリウス『アエネイス』第4歌——

丹 下 和 彦

### はじめに

トロイア王族の一人であるアエネアスは、10年にわたるギリシア軍の攻撃によってイリオスの城砦が陥落する寸前、父アンキセス、息子アスカニウスら一族郎党を率いて城を抜け出し、イダ山麓に逃れる。そこで船を建造し、初夏の頃海上に出る。そして漂泊の船旅が始まる。

彼が、王族の一人でありながら、城市と運命を共にしなかったのはなぜか。それはそういう宿命 *fata* にあったからである。というのは、これはもうすでに第1歌で言われていることであるのだが、アエネアス自ら、「わたしが目指すのは父祖の地イタリア、一族の祖は至高のユピテル。／二十隻の船を率いてプリュギアの海に乗り出したのも、／母神が示す道を辿り、課せられた運命 *fata* に従ってのこと」(*Ae.* 1. 380～82)<sup>1)</sup>と言っているとおり、彼には新しい国家をイタリアの地に建設することが神意 *fata* によって義務づけられていたからである<sup>2)</sup>。これはまたアポロ神の神託 *fata* でもある。アエネアス一行はデロス島で「いにしえの母を求めよ」と、その到達すべき地の予言を受ける (3. 94～97)。そして約束の地をクレタと読みまちがえたあと、一行はイタリアこそ目的の地であることを知る。

神だけではない。アエネアスの夢に現われたヘクトルの亡霊もまたアエネアスにトロイアを落ちのびて新たな国家を建設するようにと要請する。「トロイアは己れの聖物と守り神を *sacra suosque Penates* あなたに委ねる」(2. 293) と。

アエネアスには脱トロイアが神からも人間からも要請されている。脱トロイアだけではない。新しいトロイアを建設することが要請されている。この要請を受けてアエネアスは旅に出る。目的とする地はイタリアのラティウムである。それは長く困難な旅である。それはトロイアからイタリアまでの単に物理的空間的な旅であるだけではない。長い旅のあいだにアエネアス自身も変貌する。それは精神的な旅でもあるのである。彼はどのような変貌を見せるのか。

『アエネイス』が『イリアス』と『オデュッセイア』を手本として書かれたものであることは周知の事実である。アエネアスの旅はオデュッセウスの旅に相似する。しかし一方は単に私的な望郷の旅であるのに対し、他方は上に述べたように神から、そして人間からも要請を受けた旅、いわば使命を帯びた旅である。アエネアス自身、自らの旅が神意 *fata* による目的のある旅であることを自覚している<sup>3)</sup>。この自覚がアエネアスをオデュッセウスとは異なる旅行者に仕立てる。さてそれはどのように異なるのであろうか。

## 1. 船出……波に浮寝の

焼け落ちる城を逃れ出たアエネアスは、しばらくその身をイダ山麓に潜め、そこで艦船の建造に当たったのち、「初夏に入るやただちに *vix prima inceperat aestas*」(3. 8) 祖国トロイアを後にして「亡命の身を大海へと向け *ferox exsul in altum*」(3. 11) た。それは、「どこへ運命が導くのか、どこに定住を許されるのか、定かでない *incerti quo fata ferant, ubi sistere detur*」(3. 7) 旅であった。

最初に彼らが寄港するのはマルスの地、すなわちトラキアである<sup>4)</sup>。その地で犠牲式を挙げようとしてポリュドルスの亡霊に遭遇し、この「残忍な地、貪欲な岸から逃げよ *fuge*」(3. 44) との託宣を聞く。ポリュドルスはアエネアスと同じくトロイア王族の一人で老王プリアムスの末子であったが、年端もゆかぬ身としてトロイア攻防戦には参加せず、莫大な黄金とともにトラキア王ポリュメストルの許に預けられていた。その彼を黄金に目の眩んだポリュメストルが殺害したのであった。アエネアス一行は改めてポリュドルスの葬儀を取り行っただのち、この「罪に穢れた土地 *scelerata terra*」(3. 60) をあとにする。

次に寄港したのはエーゲ海のほぼ真中に位置するデロス島である。土地の王でありまたアポロの神官でもあるアニウスとアンキセスとが旧知の仲であったゆえに、一行は歓待される。アエネアスはアポロ神に祈りを捧げ、旅の目的地はどこかを尋ねる、「誰なのか、われらの導き主は。どこへ行って居所を定めよ、と命じるのか *quem sequimur? quove ire iubes? ubi ponere sedes?*」(3. 88) と。するとアポロは答える、「忍耐強いダルダヌスの子孫よ、おまえたちが父祖の血筋から／最初に生を受けた土地、その同じ土地の実り豊かな胸がおまえたちの／帰還を迎えるだろう。いにしえの母を探し求めよ *antiquam exquirite matrem*」(3. 94~96)<sup>5)</sup> と。しかしこの神託を聞いた者だれ一人その意味するところを理解することができない。父アンキセスがそれはクレタ島であると解釈する。「わたしの聞き覚えに間違いがなければ」一族の祖テウケルがクレタからトロイアへ移住したというのである。かくして一行はクレタ島を日指す。

クレタはしかし安住の地ではなかった。上陸して生活を始めた一行に疫病が襲ってきたからである。「人々はいとしい命を落とすか、あるいは、体を痛々しく／引きずった。このとき、

田畑はシリウスに焼き尽くされて不毛となり、／草は枯れ、病んだ作物は日々の糧となることを拒んだ」(3, 140～42) ののである。途方にくれたアエネアスの夜の夢に故郷トロイアから携えてきた守り神ペナテスが現われて告げる、「変えるべきは住む場所だ。この岸ではないのだ。おまえにデロスの神（アポロ）が／勧めたのは。クレタに居住せよ、ともアポロは命じなかった。／ギリシア人がヘスペリアと名づけて呼ぶ地がある。／いにしえの土地にして、武力と肥沃な土壌ゆえに強大だ。／かつての住人はオエノトリ人であったが、いまは彼らの子孫が／指導者の名にちなみ、その民の国をイタリアと呼んでいる。／この地こそわれらが住むべき場所 *hae nobis propriae sedes*。ここが出生の地だ、ダルダヌスも、／わが一族の始祖、父イアシウスも。／さあ立て」(3, 161～69) と。たちまちに寢床を蹴ったアエネアスは事の次第を父アンキセスに告げ、その決断によってクレタをあとにすることとする。ここで初めて航海の目的地が決定する。目指すはイタリアである。

ところが出港後ほどなくして海上で嵐に見舞われ、船団は航路をはずれてギリシアの西岸を北上することになる。ストロパデス島でハルピュイアどもに悩まされたのち、ザキュントス、イタカ、レウカスの島々を縫って進み、アクティウムの岸に上陸し、競技祭を催す<sup>6)</sup>。そこを出立したのち、今度はカオニアのプトロトムの町に入る。そこはプリアムスの子ヘレヌスがアンドロマケを妻として治めている町であった<sup>7)</sup>。一行はここで歓待を受けたのち、再びイタリアの地を目指して出帆する。一路南下してイタリア半島南端を廻航しようとするが、怪物の棲むメッシナ海峡は避け、シキリア島の南端パキュヌス岬を目指す。この間キュクロプスらの棲む岸边に漂着し、かつてウリクセス（オデュッセウス）がポリュペムスの洞穴から逃げ出した際、一人取り残されていたアカエメニデスと偶然出会い、これを救出するという一幕も付け加えられる。

一行はパキュヌス岬を廻航したのち島の西端ドレパヌムに至る。ここで父アンキセスが死去する。アエネアスは再び出帆する。「いまやシキリアの地は視界から消えた。沖に向け、／彼らは喜々として帆を張り、泡立つ波を青銅の船先で切り進んでいた」(1, 34～35)。このとき女神ユノは風神アエオルスを使って暴風を起こさせる。「いま、わたしの憎む民がテュレニアの海を航海し、／イリウムの敗れた守り神をイタリアへと運んでいる。／風どもに力を吹き込め。船を粉微塵にして打ち沈めよ」(1, 67～69)。結果、アエネアスは這々の態でカルタゴの海岸へと漂着することになる。この漂着者をカルタゴの女王ディドが引見する。この歓待と好意に応じてアエネアスは、トロイア陥落の模様とその後の漂泊の詳細を物語る（第2、第4歌）。上に述べてきたのはその語りの概略であった。そして「そこ（シキリア）を出発したあと、わたしは神の力であなたの岸に着いたのだ」(3, 715) と、アエネアスはその苦難の旅を語り終える。

旅は最初、行方定めぬ旅であった。試行錯誤ののち、いまその目的とすべき土地はイタリア

であることがわかった。アエネアスがイタリアを目指すのは、そこに新国家を建設せよとの神意 *fata* を受けてのことである。その過程でまた神から、あるいは予言者から細々とした指示も受ける。彼が最終的にイタリアの地を目指すことになったのは、クレタ島で一族の守り神ペナテスの託宣を夢に聞いたからである。またイタリアへの航路については、プトロトゥムのヘレスから細かな指示を受けている。このように彼の旅は神や人間のさまざまな指示援助のもとに行なわれる。しかしだからといって、それは決して平穏な旅ではない。ただひとりこの航海を阻害しようとする者がいるからである。トロイア戦争以来トロイアに対して敵意を抱く女神ユノがそれである。風神アエオルスを使喚してイタリアへの航路からはずれさせ、カルタゴへと漂着せしめたのは、まさにこのユノ女神の差し金であった。そしてユノ女神の妨害は、こうした嵐、難破、漂着という物理的な形でだけで示されるのではない。新国家建設へのアエネアスの決意を鈍らせ逸らせるような妨害をもまたユノは企てる。

## 2. デイド……徒な深情け

『アエネイス』第4歌の冒頭はカルタゴの女王デイドの恋に悩む姿を写すことから始まっている。

しかし女王は、すでに前から心に重い恋の傷 *gravi cura* を負っていた。／脈打つ血で傷を養い、目に見えぬ災に苛まれている。／しきりに勇士の武勇が心に浮かび、かの一族の榮譽がしきりに心中を／駆けめぐる。彼の面立ちと言葉は胸に固く刺さって／離れず、恋の悩みは体が安らかに憩うことを許さない (4. 1~5)。

恋の相手はアエネアスである。イタリアを目指すアエネアスの船団をアエオルスを喚して起こした嵐によってカルタゴの地へ漂着せしめることに成功したユノは、次には愛の女神ウェヌスの力を借りてアエネアスを恋の糸に搦め取らせることに成功する。

デイドから心のうちを打ち明けられた妹のアンナは、周囲に犇く敵対勢力からカルタゴを護り立てていく必要性から、アエネアスを国家経営のパートナーとして迎えることを歓迎し、姉に恋の成就を焚きつける。「彼女(アンナ)はこのように言って激しい愛の炎をデイドの心に焚きつけると、／思い定まらぬ胸に希望を投じ、恥じらいの心のいましめを解いた *solvitque pudorem*」(4. 54~55)。恥じらいの心 *pudor* とは、デイドの死別した前夫シュカエウスへの貞節(二夫に見えずとの誓約)を表わす。デイドの心を縛っていた呪縛が解ける。以後恋に身を焼くデイドは、「都中をさまよひ、／熱情に狂う *furens* さまは、まるで矢を射当てられた雌鹿のよう」(4. 68~69)である。そしてこの熱い思いがついに遂げられる時がくる。もちろんそ

ここにはまたユノ女神の策略が働いている。

あるときディドは狩猟を催す。アエネアスの一党もこれに参加する。一行が森へ向かったところで、女神ユノは嵐を起こす。雨に降り込められて狩る者も勢子もみな散りじりになる。「だがディドとトロイアの指揮官は同じ洞穴へと／辿り着く。そこにわたしも臨座しよう。そなた（ウェヌス）も同じ決意であるなら、／わたしは揺るがぬ結婚の契りを結ばせ、彼女を正妻と宣言しよう。／これをもって婚礼としよう *hic hymenaeus erit*」(4. 124～27)。事実このとおりに事が運ぶ。ディドとアエネアスは狩猟中に嵐に遭う。そして「ディドとトロイア人の指揮官は同じ洞穴へと／辿り着く。原初の神格たる大地の女神と介添えのユノとが／合図をする。と、火が天上に閃いて婚儀の／立ち会いとなり、峰の頂ではニンフたちの叫びがこだました。／この日が破滅の始まり、これが災いの原因であった。もはやディドは体面や評判を気にかけず、／人目を忍んで恋の思いに耽ることもない。／これは結婚だと言ひ、こう呼ぶことで罪に蔽いを掛ける」(4. 165～72)。かくしてディドの思いは遂げられた。彼女の恋は成就したのである。しかしまた「これが災いの原因であった」。「結婚」の噂はたちまちにしてリビュアの町を駆け抜けていく。そしてかねてよりディドに求婚していたガエトゥリ族<sup>9)</sup>の王イアルバスの耳に届く。イアルバスは、かつてディドの一党がテュロスよりこの地へ流れ来たった折、国土を与えて定着するのを援けた男である。その好意を裏切られた思いのイアルバスは、全能の神ユピテル<sup>10)</sup>に祈願してこの縁組みを壊そうと図る。「あの女はわれらが領土内をさすらい、狭い土地を／買って都を置きましたが、これに海岸の耕地と／その地権を与えたのはわれわれです。それを、われわれとの婚儀を／拒絶したうえにアエネアスを主として王領に迎えました。／いまや、かのパリスめは女々しい取り巻きとともに *semiviro* / 顎と香油したたる髪とをマエオニアの頭巾に／包み、獲物を掌中にしています。われわれはといえば、神殿への捧げ物を、／もちろん、あなたのために届け、評判にすがっていますが報われません」(4. 211～18)。

この願いを聞き届けたユピテルは使神メルクリウスを遣して、アエネアスにイタリアでの建国という大目標を思い出させ、ただちにカルタゴを出港するよう促さしめる、「船出をさせよ。これが要だ。これをもってわが言づけとせよ」(4. 237) と。メルクリウスはアエネアスにこの言づけを伝える。これを聞いたときのアエネアスの様子は以下のように描写されている。「しかしこれ（メルクリウスの姿）を見たアエネアスは動転のあまり口もきけず、／戦慄に髪は逆立ち、声は喉に詰まった。／この場を去って逃亡し、愛おしい土地を捨てようと胸を焦がす *ardet abire fuga dulcesque relinquere terras*。／神々の警告と命令はかくも強く彼を驚愕させた」(4. 279～82)。神からあたかも痛棒を喰らったかのように、アエネアスは自らに課された義務 *fata* を思い出すのである。それだけ彼もディドとの恋に我を忘れていたことになる。

愛が綻びはじめる。少くともアエネアスのほうの気持は醒めはじめる。それはひとえにディドの愛が強すぎたからである。アエネアスに対する一途な愛は、その一途さゆえに思慮を欠い

た、といわねばならない。イアルバスの存在を無視したことである。その無視が反発と恨みを買うことになった。それはユピテルへの祈願となって現われ、結局廻りまわってアエネアスの義務の覚醒へと繋がる。義務の覚醒は愛からの逃避を促す。かくしてディドの愛は、その一途さゆえに破綻せざるをえないのである。

ところでディドの愛の一途さは、その実際のありようはどのようなものであったのか。ディドはアエネアスを目見たときから恋に落ちた。これはまちがいない。彼女自身が言う、「この方ただ一人だけがわたしの感覚をたわめ、よろめくばかりに心を／突き動かした。わたしには分かる、これは昔の炎の名残 *veteris vestigia flammae*」(4. 22～23) と。最初のうちは恥 *pudor* の概念がこの恋の邪魔をする。しかし妹アンナによって恥の縛めが解かれたのちは、ディドは恋の道を一途に突き進む。その姿は、「熱情に狂う女 *furentem*」(4. 65)、「熱情に狂う *furens*」(4. 69)、「熱病にとらわれ *peste teneri*」(4. 90)、「狂気 *furori*」(4. 91) といった激越な表現で捉えられている。アエネアスを迎えた宴の席では、彼のトロイア以来の苦難の物語を繰り返し聞きたがり、宴果てて一人あとに残されるとアエネアスが去ったあとの寝椅子にその身を横たえてみる。また父親似のアスカニウスを胸に抱き寄せて父親への思いを紛らせようともしてみる。カルタゴの国全体が女王の恋とともにその活動を止める。若者は日常の鍛錬をやめ、国土防衛のための工事も中断される。あたかもカルタゴの国全体が女王ディドその人であるかのように、女王とともに恋に悶えるのである。

古来恋の思いに取り籠められた女性は多い。バイドラがそうであり、メデアがそうである。ディドの祖型として、わたしたちはカリュブソとキルケを挙げることもできるかもしれない。彼女らもまたオデュッセウスを捉えて帰そうとしなかったのである。ここでわたしたちは、詩人ウェルギリウスがディドを描くに際してその手本としたと思われるメデアの例を引きたい<sup>11)</sup>。ヘレニズム期の詩人アポロニオス・ロディオスの描いたメデア、その恋に悩む姿である。

まもなく夜が大地の上に闇をひろげた。海上では  
水夫が大熊やオリオンの星々を  
船から眺め、旅人や門番はすでに  
眠りを望んだ。深い眠りが  
子供を失った母親のまわりを包み、  
町には犬の鳴き声も、ひびく人声もすでに絶え、  
しじまがしだいに暗くなる闇を支配していた。  
だが、メデアには甘い眠りが訪れなかった。

『アルゴ船物語』3. 744～51<sup>12)</sup>

同じく恋に悩むディド——このときすでに恋は綻びはじめている——を、ウェルギリウスは次のように描く。

夜となった。穏やかな眠りを楽しみながら疲れた  
体が地上に横たわり、森も海面の波立ちも静まっていた。このとき星々は滑り行くめぐりの  
なかばにあり、  
このとき田野のどこにも声はない。家畜も彩り美しい鳥たちも、  
広く澄み渡る湖や、茨の茂る  
田園に住む生き物のどれも、夜のしじまのもと眠りについていた。  
〔悩みを癒し、心から労苦を忘れていた。〕  
しかし、心に悲運を負うフェニキアの女王は、ただひとときも  
くつろいで眠りに落ちることがない。

『アエネイス』4, 522～30

夜の静寂と、その中で報われぬ恋の思いに悶々と時を過ごす女。『オデュッセイア』の詩人はカリュプソやキルケをここまで描くことはしなかった。1年間の同棲中、キルケがこのように恋の素顔を見せることはない。カリュプソとてそうである。詩人の筆はむしろオデュッセウスの望郷の思いを描くことに忙しい。恋する女性の心理を夜の静寂と関係づけて歌ったサッポーこそ、このディドの祖型と目されるかもしれない。

月は沈み、プレイアデスは落ちて  
いまは真夜中、時は移ろい、わたしは一人眠る<sup>13)</sup>

いずれにせよここには一人の女性が、一人の人間が息づいている。その息づかいをわたしたちは感じ取ることができる。ディドを一人の恋する女性、人間として描いたことは、ウェルギリウスの功績である。先蹤としてアポロニオスのメディアが、そしてサッポーがいるとしても。ここには〈夜の静寂と恋する女〉という一つの詩的場面がルーティーン化され、また系譜化されていると解してよいかもしれない。

話をメディアとディドに戻す。二人の恋心はいずれも恋の神アプロディテ（ウェヌス）によって引き起こされたものである。そしてこの恋の女神の背後には、それを使喚したユノ女神がいる。ユノの要請を受けたウェヌスは、ディドをして一途にアエネアスを恋するように仕向ける。ディドの恋は、一途であるからこそ恋の思い以外の感情も思慮もそこに入る余地がない。イアルバスの存在は無視される。カルタゴの現状も将来も、彼女の考慮のうちに入らない。そ



こには打算も計算もない。国の将来を慮り、アエネアスを共同統治者とするために恋の成就を図るのは、妹アンナのほうである。ウェヌスに操られているディドに打算はない。彼女の恋はそれだけ純粹であるといえるのである。

この純粹な恋が破れると、その反動は大きい。彼女は「これほど大いなる愛が破れるとは思ってもしていないゆえ」(4. 292)である。しかし彼女の純粹さが、その恋の一途さが(国中の尊となって)イアルバスを怒らせた。愛が綻びはじめる。上に挙げた夜の静寂の中で悶々と時を送る彼女の姿は、愛の綻びを感知し報われぬ恋を嘆くその心情を描いたものであった。「懊惱は倍加し、何度もぶり返す／愛の思いは荒立ち、怒りの大波をうねらせる」(4. 531~32)のである。愛が怒りに変わる。それはそれだけ愛していたということである。その愛がそれだけ純粹であったということである。怒りは愛の証拠にほかならない。この愛の綻びはどのように收拾されるのであろうか。

### 3. 遁走……あとは白浪

先に少し触れたように、使神メルクリウスの訪問を受けたアエネアスは己が身に課せられた義務を思い出す。彼にはイタリアの地に新しい国家を建設することが神意 *fata* として課せられていた。それを思い出したのである。彼は「この場を去って逃亡し、愛おしい土地を捨てようと胸を焦がす *ardet abire fuga dulcesque relinquere terras*」(4. 282)。カルタゴは愛おしい土地 *dulces terras* であった。この「愛おしい *dulcis*」なる語にはディドとの甘い同棲生活の味も含意されていよう。しかし神意 *fata* には逆らえない。アエネアスはカルタゴ出立を決心し、その準備をはじめめる。それは神意 *fata* の遂行であり、しかし同時に愛からの遁走でもある。

アエネアスはメルクリウスの告知を聞くや否やただちに部下を呼び、カルタゴ出立の準備に当らせる。「艦隊を装備せよ。口外無用だ。仲間を海岸に集結、／武器を準備せよ。そして、乱を起こすどのような理由もないように／見せかけよ」(4. 289~91)。一方彼自身はディドの説得に当る。上の台詞に続けて言う、「自分はそのあいだに、いまは最良の人ディドも／気づかず、これほど大いなる愛が破れるとは思ってもしていないゆえ、／歩み寄りを試みてみよう」(4. 291~93)。

しかしディドは気づいていた。「誰も恋する者を欺けない」(4. 296)のである。彼女はアエネアスに哀願し、また彼を難詰する、「不実な男よ *perfide*」(4. 305)、「酷い男よ *crudelis*」(4. 311)と呼びかけ、「わたしから逃げるのか *mene fugis?*」(4. 314)と問いかけ、「崩れゆく家を哀れんでおくれ *miserere domus labentis*」(4. 318)と哀願し、「あなたの考えを振り捨てよ *exue mentem*」(4. 319)と懇願する。

これに対してアエネアスはどうか答えるのであろうか。彼はディドの言い分をほぼ認める、「あ

あなたが口に出して／数え上げられることどもを、女王よ、わたしは決して否みはしない。／それだけ尽くしてもらったエリッサ（ディドの別名）との思い出を厭うことはない」（4. 333～35）と。しかし肝要な点の一つずつこれに反論していく。ディドとの夫婦関係については、「新郎の／松明を捧げ持ったことは、一度もなく、そのような盟約を結んだこともない」（4. 338～39）と言い、アポロの神託に従ってイタリアに新国家を建設するのは——そのためにいまカルタゴ脱出を目論んでいるのであるが——フェニキア生まれのディドがカルタゴに国を持つと同じ、「われわれにも外地の王国を求めることは許されている」（4. 350）として、（あなたならぬ）イタリアこそわが愛、わが祖国と言いつ切る。しかもその上で「わたしがイタリアを追い求めるのは本意ではない *Italiam non sponte sequor*」（4. 361）と言いつ添える。それはまさにメルクリウスに託されたユピテルの神意 *fata* ゆえなのであると。

神託や神意をもち出されてはディドに勝ち目はない。「なるほど、それが天上の神々の仕事だ。そんな気遣いが人々の平静を／乱すのだ。わたしはあなたを引き留めぬ。言われたことに反論もしない。／行くがよい、風に乗りイタリアを追い求めよ。波頭を越えて王国を日指せ」（4. 379～81）。しかしアエネアスが裏切りの罰を必ず受けて、こののちわがディドの名を幾度も呼ぶことがあるようにと言いつ残して座を立つ。後に残されたアエネアスは彼女の心中を察しつつ「大いなる愛ゆえに心が揺らいでいた *magnoque animum labefactus amore*」（4. 395）ものの、「それでもなお、神々の命令 *iussa divom* を遂行し、艦隊の様子を見に戻る」（4. 396）こともするのである。出港準備にかかっている部下たちは櫓材にまだ枝葉のついている生木を使用せざるをえないほどに「逃げ去ることに逸っていた」（4. 400）。

トロイア人たちの慌ただしい出港準備を見、またすでに恋人アエネアスの心中を思い知らされたディドは、せめて順風が吹く季節まで出発を延ばせないか、イタリア行きを止めはせぬが、「ただ空しく過ぎる時間が欲しい。狂おしい熱情を鎮める間が欲しい。／そのあいだに、これがわが運、敗れた心は痛みを負うものと学べようから」（4. 433～34）と、妹アンナに心中を吐露する。アンナは姉の気持をアエネアスに告げる。しかしアエネアスの決心は揺るがない。「運命 *fata* が立ちふさがり、神が勇士の耳に栓をして平静を与えている」（4. 440）からである。このときの状況は樫の木の比喩を使って以下のように描写されている。

それはあたかも、年とともに芯が通って頑強な樫の木に  
 アルプスから吹く北風の一团がいまはこちら、いまはあちらと吹きつけて  
 根こそぎにしようとする互いに競うときのように。軋む音が走り、高い  
 梢の葉は揺れる幹から落ちて地面を覆う。  
 だが、樫の木そのものは岩場にしっかりと動かず、頂が天空へと  
 伸びているのと等しいだけ根が冥界へと伸びている。

そのように、英雄はこちらから、またあちらからと絶えず声による打撃を受け、大いなる胸に苦悩を感じ取る。だが、意志は揺るがぬまま、涙はこぼれても心を欠いている。

(4. 441~49)

樅の木 *quercus* (アエネアスの意志) をアルプスから吹く北風 *Alpini Boreae* (ディドの意を受けたアンナの言葉) が揺すぶる。しかし樅の木は軋み、梢の葉を落しはするものの、幹本体は「岩場にしっかりと動かない *haeret scopulis*」。それは根が深く冥界にまで伸びているからである。吹きつける北風は樅の木を軋ませ、木の葉を吹き飛ばす。しかし幹本体を倒すところまでは至らない。倒れるか倒れないか、そこまでの事態には至っていない。いかに風が吹きつろうとも樅の木は倒れることなく立ち続けている。

このことは、まず第一にアエネアスの意志があくまで強固であることを示している。胸に苦悩を感じはするが、意志は揺るがない。涙を流しはするが、それは無駄に流れるだけである。第二にそれはアエネアスのディドに対する愛着がそれだけ弱いということを意味していることになる。強ければもっと悩むであろう。倒れるか倒れないか、あわや倒れるところまで樅の木は揺すぶられるであろう。しかし現実には梢の葉が地上に落ちるだけにとどまる。幹が軋むだけにとどまる。折れたり根こそぎ倒れたりするところまでには至らないのである。それは互いに相拮抗する力がぶつかり合うのではなく、ぶつかり合う力には格段の差があり、小なるほうが大なるほうを倒すことはありえないといった態のものである<sup>14)</sup>。前者は愛 *amor* であり、後者は義務あるいは神意 *fata* である。詩人は *amor* と *fata* を二者択一のものとして提示しているのではない。アエネアスの選択肢は *fata* と、端から決っているのである。磐石の根を張る樅の木の比喩はそのことを示している。

神は「勇士の耳に栓をし」ただけではない。さらに出港を急がせ促す。アエネアスはすでに「船上にあり、出発を心に決めて眠りを貪っていた」が、その夢にメルクリウスそっくりの神が姿を現わし、出発を急がせる、「たわけ者め、西から吹きつける順風の音が聞こえないのか。／あの女は謀りごとと忌むべき非道を胸の内にめぐるしている。／死を決意し、憤怒の大波を幾重にもかき立てている。／逃げぬか、ここからまっしぐらに *non fugis hinc praeceps?*。[……] とととへ行け。遅れを切り捨てよ。つねに移ろい変化するのだ。／女とは」(4. 562~70) と。

この幻影に驚いたアエネアスは跳び起きて部下に出港を促す。そして自ら剣を抜き、舳綱を切り離す。そして「彼らは力をこめて飛沫をかき立てながら、蒼い水面を掃いていく」(4. 583)。朝になり、アエネアスの出港を知ったディドは瞬時追撃することも考えるが、思い直す。そして己を裏切ったアエネアスおよびその一党の将来に呪いをかける。太陽神、ユノ、ヘカテ、復讐女神および彼女自身の死に与る神々にアエネアスの受難を祈願する、「それに、さあテュ

ロスの人々よ、彼の子ら、将来の血統のすべてを／あなた方は憎悪の念で悩まし続けよ。わが灰にこれを手向けて／供物とせよ。いかなる愛も盟約も両国民（カルタゴとイタリア）のあいだにあってはならぬ。／立ち上がれ、そなた、まだ見ぬ者よ<sup>15)</sup>、わが骨より出て復讐者となれ。／火と剣をトロイアの移民のうしろから突きつけるのだ、／いまも、このさきも、いつであれ、もてる勢力があるときは。／海岸が海岸と、波が波と敵対し、／武具が武具と敵対するよう祈る。戦い続けよ、彼らもその子孫も」(4. 622～29)。愛はとっくに怒りへと転化している。しかしそのことが彼女の愛の深さ、強さを逆に証明しているともいえるであろう。裏切られて怒りも感じられぬような愛は、十分に愛されることのなかった愛である。そしてこの愛がアエネアスのほうには欠けている。容易に切り捨てることのできる愛は愛ではない。少なくとも充分には愛されなかった愛である。

このあとディドは火葬の薪を積み上げた上に登り、かつてアエネアスから贈られた剣の上に身を伏して自死を遂げる。この死をもって彼女の愛は完結する。狂おしい愛は怒りと呪いに転化し、いま死でもって終息する。怒りに転化したこと、死でもって終息したこと、そのことが彼女の愛の強さ、深さ、そして純粋さを証明する。そこには打算はなかった、といてよい。そこには利害も伴わなかった。アエネアスが残ればカルタゴの国家経営がいまより安定することは充分想像されるところであるが、彼女にその意志はなかった。彼女にはまずアエネアスへの愛があった。ウェヌスがそうたくらんだ。ウェヌスの術中にはまったこと自体が、その愛の純粋性を示すのである。純粋な愛には死による結末しかなかったのである。このディドをアエネアスは捨て、カルタゴを後にした。ディドのそれに相応する愛は、彼にはなかったかのよう

かくしてユノの策略は失敗に終る。

## おわりに

詩篇『アエネイス』の構成に関しては諸説ある。すでに4世紀の文法家セルウィウス Servius は、巻頭の第1行 *arma virumque cano* に現われる *arma* (武器、戦争) が7～12歌の戦争を示し、*vir* (勇士アエネアス) が1～6歌のアエネアスの漂泊を象徴するとして、ここにホメロスの二つの詩篇の影響を見ようとした。いわゆる2分割説である<sup>16)</sup>。この2分割説に飽き足りない向きは3分割説を唱える。たとえば Pöschl がそうである。彼は全12歌を3等分し、それぞれのあいだに闇・光・闇のイメージの交替を読み取ろうとする<sup>17)</sup>。また Büchner は、1～4歌をカルタゴにおけるアエネアス、5～8歌をラティウムへの到着と戦争の準備、9～12歌を戦争というふうに主題別に分別して捉えようとする<sup>18)</sup>。これらを踏まえて中山は、1～4歌を東洋的、トロイア的なものからの脱却、5～8歌はイタリア的、ローマ的なものの学習、

9～12歌は戦い、すなわちローマ的なるもの確立を目指す実践と位置づける<sup>19)</sup>。いずれもホメロスの影響は認めつつ、一方でウェルギリウスの独自性を探ろうとする試みである（この点は2分割説の評家たちも変らない）。

独自性の探究は構成上の問題に限定されない。当然のことながらホメロス、ウェルギリウス両者の製作の年代、政治的社会的背景、詩人の意図するところは、同じではない。そうしたものが集約的に現われているのは主人公の人物像の違い——アエネアスとアキレウス、ヘクトル、オデュッセウスらとのそれ——である。たとえば2分割説をとる Otis も、主人公アエネアスの性格の発展——前半の漂泊すなわち試練を通して弱い優柔不断の人間から強い決断力のある人間への変貌——にホメロスとの相違点を見出そうとする<sup>20)</sup>。Otisによれば、7歌以降の後半ではアエネアスは *divine man* として登場することになる。

このアエネアス像変貌の契機の一つに、第4歌におけるカルタゴでの〈愛の経験〉も挙げることができるのではないか。カルタゴはフェニキア人の国家である。そこはかつてアエネアスらも属していたアジア的世界である。それは豊かな富の世界、また同時に安逸と柔弱の世界であるともいえる<sup>21)</sup>。カルタゴは、そのアジア的世界の地中海における再現である。そしてディドはその象徴である。そのディドから仕掛けられた愛を、アエネアスは振り切って逃げる。この遁走は東洋の安逸と快楽の世界からの、同時にまた己の過去からの脱出を意味する。アエネアスはトロイアの地を出てすでに7年。試練の航海を経験している。しかしまだそのアジア風の脆弱の気風を捨て切っていない。恋のライヴルのイアルバスは、その目に映ったアエネアスの姿を軽蔑して次のように言っている、「いまや、かのパリスめは女々しい取り巻き *semi-viro* とともに／顎と香油したたる髪とをマエオニアの頭巾に／包み、獲物を掌中にしています」（4. 215～17）と。パリスとは女しか征服できない女々しい男との意を表わし、女々しい取り巻き *semivir* とはブリュギア（トロイア）の大地母神キュベレに仕える宦官（去勢男子）を指し、しかも髪には香油が振りかけられ、頭にはトロイア特有の頭巾が載っている。全体に女々しさと柔弱の気が横溢している。そのアエネアスがディドの愛を振り切り、カルタゴの地を出立することによって、それまでの生活と絶縁するのである。イタリアの地に待っているのは質実剛健の世界であろう。その地に新国家を建設するにはこれまで以上の困難と試練が予想される。その前にしかし彼は、その過去の世界と絶縁しなければならないのである。それがカルタゴ出港である<sup>22)</sup>。あとはもうアエネアスは迷わない。また誰からも迷わされない。次に漂着すンキリア島で、ユノの邪魔が入って船を焼かれる事件が出来るが、それすらもはやアエネアスの心を揺るがすことはない。

前章でわたしたちは、アエネアスがディドの愛を振り捨ててそそくさと出港していく姿を見た。最終的には夢に現われた使神メルクリウスに叱咤されたからであるが、すでにアエネアスには早くから新国家建設への神意 *fata* が課せられていたのであった。カルタゴでの安逸な生

活が義務の意識を麻痺させていただけのことである。課せられた義務を思い出したアエネアスは出立する。ディドの愛はアエネアスをカルタゴに引き留めることはできなかった。ディドはアエネアスに恋をした。ユノがウェヌスをして彼女に恋心を催さしめたからである。ではアエネアスはどうかであろうか。アエネアスはディドを愛していたのか<sup>23)</sup>。たとえば第4歌395行をみれば、彼の心中にディドに対する愛情がなかったわけではないことがわかる。その一方で彼は、イタリアこそわが愛（同、347行）とも言っている。またイタリアを追い求めるのは本意ではない（同、361行）とも言っている。彼は心中動揺している。そう見ることができる。しかし彼がディドと決定的にちがう点は、ディドのようにウェヌス女神の捕われの身ではないということである。ユノがウェヌス女神に恋の擒とするよう要請したのはディドであって、アエネアスではなかったのである。アエネアスにディドの愛に報いる気持が皆無ではないにしても、愛の深さ強さはディドのそれに遠く及ばない。ウェヌスが手を貸していないからである。かくしてディドの愛は空しく潰えなければならない。

ここでわたしたちはもう一度あの樅の木の木をの木の比喩を思い起こしたい。樅の木はいかに激しく北風が吹きつけようとも、幹が軋み梢の葉を落すことはあっても、倒れることは決してなかった。深く地中に根を張っていたからである。しかし最初からそれほど強く根を張っていたわけではなかったろう。そもそもアエネアスは自ら発意して新国家建設を決意したのではなかった。最初は彼も城市を枕に討死にするつもりでいたのである<sup>24)</sup>。「武器を取って死ぬことが誉れとのみ考え」（2. 317）でいたのである。しかし神から神意 *fata* を受け、新国家建設の実行者に選ばれた。ヘクトルの亡霊からもトロイアの守り神 *penates* の遷座を委託された<sup>25)</sup>。それゆえに一族郎党を引き連れて城外に逃れたのである。その彼がいま冷やかにディドの愛を拒絶する。トロイア出港以来7年間の漂泊が試練となって、それまではただ意識の領域でのみ止まっていた神意 *fata* がいまや彼の血となり肉と化したかのようである。試練の総仕上げがディドからの求愛であった。これこそいばん危険な誘惑であった。その愛を振り切ることによってアエネアスの義務感はいっそう強固なものとなり、新国家建設の精神的基盤として揺るぎないものとなったのである。

この最大の危機の場において、わたしたちは樅の木があわや岩根から剥がれて倒れ崩れそうになるまで北風に翻弄される場面を期待する。しかし詩人はそこまで描いていない。悩みはするが、アエネアスの心は二分されるわけではない。8割方心は決っている。そしてまた詩人はアエネアスには恋の女神ウェヌスを差し向けなかった。彼の愛は——もし愛があるとするなら——受身の愛にすぎなかった<sup>26)</sup>。自ら進んでディドを愛することはなかったのである。さらにいえば、婚姻を取り結ぶ松明を手にもなかつた。もし彼にもウェヌス女神が取り憑き、いま以上の懊悩の挙句別離に至ったとするならば、篇中のそのアエネアス像はいっそう輝きを放つことになったであろうと思われる。これはしかし無い物ねだりである。神から選ばれた身

で、節目節目で神意を吹き込まれるアエネアスに、(敢えて言えば) 人間的な愛の感情が入り込み、また受け容れられる余地はない。篇中アエネアス像はたしかに変貌する。しかしそれはあくまで神意 *fata* の成就を目的とした行程内における変貌にすぎない(神意 *fata* の実行者としての姿がより鮮明に、より強固になった点で“成長”と称するならば、彼は成長したと言ってもよからう)。それ以外の世界はまったく彼の慮外にある。ディドとの恋を突破口に神意 *fata* に懐疑の目を向けることは、ついぞなかった。その意味で彼は神の傀儡なのである<sup>27)</sup>。アエネアスは英雄であるかもしれない。しかし少なくとも人間的な英雄ではない。こうしたアエネアスを、のちに冥府で遭遇したディドはもはや一顧だにしないのである<sup>28)</sup>。この不幸な愛の形は、振り返ってみれば、いくぶん矮小化された形だとはいえ、いまのわたしたちの周囲にも数多くある。

## 注

- 1) 『アエネアス』の訳文は、岡道男・高橋宏幸訳(京都大学学術出版会版)による。但し訳文中の固有名詞等の音引きは引用者の都合でこれを省かせていただいている。
- 2) 第1歌257行以下のユピテルの言葉をも参照。
- 3) オデュッセウスの旅もまた決して無目的な旅なのではない。望郷そのものが旅の一つの目的になりうるだけでなく、なにより求婚者退治と家庭再建という目標が存在する。これはしかし第11歌の冥府行でテイレンシアと母アンティクレイアから留守宅の情報を得るまでは、オデュッセウスの念頭にはなかったことである。これ以後に初めて帰郷の旅の目的となるのである。トロイア出航時オデュッセウスにはまず帰郷することだけが目的であった。
- 4) この点は『オデュッセイア』と同じである。オデュッセウスもトロイア出立後最初にトラキアに至り、キコネス人の町イスマロスを掠奪した(第9歌39行以下)。しかし結局は敗北を余儀なくさせられ、海上に逃れる。その後嵐に遭遇し、マレアの岬を廻りキュテラの島を過ぎる辺りで航路からはずれてしまう。
- 5) ダルダヌスはコリュトゥスの子。コリュトゥスはイタリア半島エトルリアにコルトナ市を創建した人物。のちダルダヌスはコルトナからトロイアへ移住した。従ってダルダヌスの裔のアエネアスがイタリアへ赴くことは帰郷を意味することになる。「いにしへの母」とはイタリアを指すことになる。しかしこの託宣をアンキセスは読み違えてしまう。
- 6) 前31年アクティウムの海戦で勝利したオクタウィアヌス(アウグストゥス)は、ニコポリスで盛大な祝祭アクティウム祭を創始する。この詩行を書く詩人の脳裏にこの史実があったことは疑いない。
- 7) ヘレヌスはプリアムスとヘカペの子で、カッサンドラと双生児といわれる。カッサンドラ同様にアポロ神から予言能力を授かっていた。アンドロマケはヘクトルの死後ネオプトレムスの側女となってギリシアへ渡るが、ネオプトレムスがヘルミオネと結婚したのちは同じ召使の身であったヘレヌスに下

げ渡されていたのである。

- 8) Cf. Page, T. E., *The Aeneid of Virgil*, Books I ~ VI, Macmillan, 1951 (1894), ad 4. 27, 55. 余談ながらこのアンナの役廻りは、あの『ヒッポリュトス』における乳母のそれに似通うところがある。
- 9) 北アフリカ西部モロッコ地方の部族。
- 10) イアルバスは神ハンモンの子。ハンモンはエジプトの神で、ユピテルと同一視される。
- 11) Cf. Page, ad 4. 522~27.
- 12) 岡道男訳。『世界文学全集 1 ホメロス／アポロニオス』講談社、1982年所収。のちに講談社文芸文庫に再録（アポロニオス『アルゴナウティカ——アルゴ船物語』、1997年）。
- 13) デイール校訂断片94。訳文は以下からの借用。アンドレ・ボナール著『ギリシア文明史Ⅰ』（岡道男、田中千春訳）、人文書院、1973年、142ページ。夜の静寂を歌ったものとしてはアルクマンの次の断片がある。

眠っている、山々の峯も溪谷も／岬も溪流も／黒い大地が養う地を這うすべての種族も／山棲みの  
チーリス 獣たちもキカラ 蜜蜂の族も／藍色の海底に棲むクノエグッ 怪物たとも。／眠っている、長い翼をもつ鳥の族も。  
 （断片89）

アルクマン他『ギリシア合唱抒情詩集』（丹下和彦訳）、京都大学学術出版会、2002年、53ページ参照。ただしここには“恋する女”は欠けている。元からなかったのか、それとも抜け落ちたのかは不明である。

- 14) 中山はこの箇所について次のように述べている。「ディードーとアンナの怒願と非難の声は嵐に、アエネアースの心は嵐に打たれる柏の木に、それぞれ喩えられているが、重要なのは、愛の苦悩に対応する枝のきしめきと幹の動揺と葉の散乱が、出発の決意に対応する柏自体の末梢的な部分と見なされていることである。つまり彼の心は左右二つの対等な部分に分かれて対立し、格闘しているのではなく、中心に不動の決意があり、愛の苦悩は周辺、いわば切捨て可能な部分にすぎないことになる。周辺を切捨てても、彼は彼であるが、中心が負ければ、彼は彼でなくなってしまう。涙は、葉と同様に、いくら落ちて、本体は傷つかない」。中山恒夫「アエネアースの愛」、『文学研究論集』第9号、筑波大学比較・理論文学会、1992年、21ページ参照。
- 15) ポエニ戦争でローマを苦しめたカルタゴの將軍ハンニバルを指す。Cf. Page, ad 4. 625.
- 16) 近代の評家では、たとえば Otis. Cf. B. Otis, *The Odysseian Aeneid and the Iliadic Aeneid*, In: *Virgil A Collection of Critical Essays* (ed. by S. Commager), Prentice Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J., 1966, p.89ff. 但しこれはホメロスの単純な模倣を意味しない。形式上は相似していても、それ以外の点で『アエネイス』の独自性あるいはホメロスとの相違点を探ろうとする試みは多い。その点で多大な貢献をしたのが、R. Heinze, *Virgils Epische Technik*, Leipzig/ Berlin, 1908 である。
- 17) Cf. V. Pöschl, *Die Dichtkunst Virgils. Bild und Symbol in der Äneis*, Wien, 1964.
- 18) Cf. K. Büchner, *P. Vergilius Maro, Der Dichter der Römer*, Stuttgart, 1961 (1955).
- 19) 中山恒夫「東洋から西洋へ——ウェルギリウスの場合」、『地中海学研究』Ⅰ、18ページ参照。



- 20) Cf. *op. cit.* p.103~104.
- 21) 中山、前掲論文「東洋から西洋へ」12ページ参照。
- 22) 形式的には第6歌における冥府行が新国家建設へ向けての最終的なスプリングボードとなるであろう。冥府で亡父アンキセスから建設プランが提示されるからである。
- 23) 中山は第4歌221, 292, 332, 395行を挙げて愛が存在したことを示す。けれどもその愛のありようがディドのそれとはちがっていたことを指摘する。中山、前掲論文「アエネアースの愛」、22ページ以下。
- 24) 第2歌314~17行参照。
- 25) クーランジュは、アエネアースに英雄の姿よりもトロイアからイタリアへトロイアの守護神の遷座を司る神官としての姿を見ようとする。フュステル・ド・クーランジュ『古代都市』（田辺貞之助訳）、白水社、1995年、209~214ページ参照。
- 26) 中山はアエネアースの愛を、「義務のために犠牲にすることのできるようなものを、いったい「恋」と呼べるだろうか」との疑問を呈示し、「カトゥルルスが開拓した語の上での「恋」と「愛」の区別」を援用しながら、結局アエネアースの愛とディドの愛は異質のものであったとしている。中山、前掲論文「アエネアースの愛」、23ページ以下参照。
- 27) 中山は Page にはじまる“アエネアース、神の傀儡説”ともいうべき見解に異を唱えている（前掲論文「アエネアースの愛」27ページ注17）。これは第4歌393行の *pius* の語の解釈如何によるが、筆者には Austin や Williams がいかように言おうと Page の見解は捨て難いように思われる。Cf. Page, *op. cit.*, Introduction xviii ff. Page の言うとおり、ウェルギリウスは桂冠詩人としてかく歌わざるをえなかったのである。
- 28) 冥府におけるこのディドの対応はいろいろに解釈できるであろうけれども、筆者はこれを詩人ウェルギリウスの一つの注釈あるいは弁明と解釈したい。あのようなアエネアース像を書かざるをえなかった我が身への、作中人物ディドの姿を借りての弁明の意志表示なのであると。あるいは自らの筆への厳しい糾弾なのであると。

(たんげ・かずひこ 外国語学部教授)